

現今の金利は自然に非す

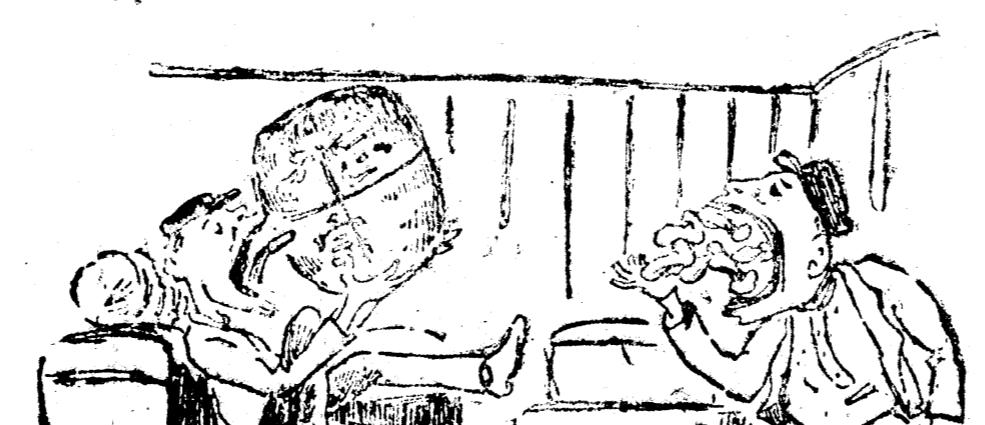
單に營利の一點より視れば日本銀行現今の利率は尙ほ幾分の引上を要するみと見て同行員が若しも政府の干渉を脱せば同行の利益は今日の比に非ざる可しと明言したるに徴しても知る可し是れひ前號に假算したる割内外は今日々本銀行の採擇すべき利率として認むるに適せざるにもせよ兎に角に銀行が制限外兌換券を行してまでも七分内外の低利を維持するは奇と云はざるを得ず其奇相の由りて起る所以を尋ねれば日本銀行の獨立未だ完からざるに在り即ち金利昂低の全權尙ほ大藏大臣の掌中に在るを以て總裁は明に金利引上の利益を認めながら進んで之を斷行する能はず株主も亦其の事の總裁の權限外なるを以て毫も之を責問せずして却て日本銀行は本と國家機關なれば徒に自行の利益をのみ圖る可きに非ずなぞ漠然たる説を立てし深く怪まさるのみ若干の資本を投じて一種の商業を營む者が當然占むべき利益を占めずして是れは國家の爲めなりと云ふ笑ふに堪へたる次第ながら果して國家の爲めなれば尚ほ可なれど所謂國家の爲めとは全く一片の空想に過ぎずして其實大藏大臣に金利昂低の全權を付與するは知らず誠らす威福を商業社會に弄せしむるの媒介と爲り隨て商業の獨立を害するの具と云そなれ真成に獨立の商人は其私恩に浴するふとなきを如何せん或は何等の方便を以てしても低利を維持するは國益なりとの議論もあらんかなれども低利維持必ずしも國益には利なるに非ざれば自然の低利とは云ふ可らず唯是れ人間社会の需要に應ぜんとするも得けんや日本銀行には紙幣發行調査監督の特権ありて恩恵の資力宏大なるが故に稍々營利社會に低利を普及し得るの觀われても人工は到底自然と被るを得ず銀行が公然低利の看版を掲げながら内質は相當の信用あり抵當ある借人に貸せるの事實は現に我輩の往々耳にする所にして貸せるとは取りも直さず資力自から限りあるの意味なる可知ら日本銀行と雖も世間自然の金利に抵抗しては自から窮せざるを得ざるの據なり之に反して日本銀行が自然の金利にて貸出すの方針ならんには其確實と認む所の者は對しては頗ると貸出して毫も躊躇せざれ借人ます／＼多ければます／＼利息を高じて以て之に應ずる所の人々の需要無限なれば利息の引上も亦無限にして無限にして無限に對し頗るとして餘裕ある可し一團に成る所の人々に借用を當たるに非ざれども低利主義は思ふありて其間に當たるに非ざれども低利主義は思ふ

○日本の運輸交通 事業 (十二)

○日本の運輸

もし物價を數倍せしめたらば如何
は超過して國の産業を招くのみ
行の人工低利は斯る極度に至る
を流さレども實際人工の程度
免かれざるは断じて疑ふ可か
て實々體に輸出の増加外資の輸
りも直さず日本銀行の人工低利
はい試に金利を引上げて一割に
する輸出の割合の増加すると其
れんみど我輩の確に保證する所

上野青森
手宮鹿鳴
平均一時間
(駐外の間)
以上の平均による
の速度十五哩
す是れ其速力
解も爲し得
の二時間)三
一日に廿里
然るに今日の
するも其行程
略ば三倍する
ば二頭立ちの
の速力運転を
といふ可し



(一) 鐵道所見

新編演義	本所缺子	赤羽月	京都御聲	大寶赤風	名古屋宮川	鶴戸源山	門司八代	幕松學平	喜田久八	小山四郎	上野久の猪	新宿直江
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三

も民謡みんぎやうも書写しょしゃする
あるの歌路かじゆへ現合げんあいの時間じかんをな
新鑑しんかんの時間じかんと能
る如く今日の鑑定かんていを
四時間内に七日
がら當局者とうきょくしゃら
終には一回全部いっかいぜんぶ
たるものといふ
用する門檻もんはんと